

想 続

死と生

一般社団法人日本想続協会

代表理事・税理士 内田麻由子

中高年のアイドル・綾小路きみまろ氏が、老人ホームへ慰問に行った時に、おじいちゃんに「あの世っていいところ？」と尋ねたら、「そりゃあいいところに決まっとる。あの世から帰ってきたヤツは誰もおらん」

今月は、3人の師の言葉をご紹介しますながら、一緒に死と生について考えてみましょう。

☆ ~ ☆ ~ ☆

上智大学名誉教授のアルフォンス・デーケン先生は、永年日本で「死生学」「死の準備教育」の研究と普及に携わってこられました。

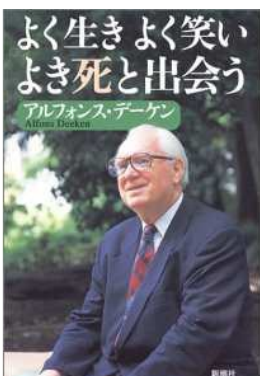
デーケン先生は、死には4つの側面があるといいます。それは、①心理的な死 ②社会的な死 ③文化的な死 ④肉体的な死です。

ホスピスや老人ホームにいるお年寄りの中には、家族や友人などが誰もお見舞いに来ない、芸術や文学に触れる機会もない、自分など生きて

いてもしかたがないと思いつつ、日々を過ごしている方もいます。肉体的には生きていても、社会的・文化的・心理的には死んだような状態です。また、社会の第一線でバリバリ働いている人でも、働き過ぎで過労死したり、ストレスでうつになったりする人もいます。社会的な生オンリーで、肉体的・文化的・心理的な生をないがしろにしています。そう考えると、「4つの死」はそのまま「4つの生」であり、4つをバランスよく生きていくことが大切なのです。

また、たとえ肉体は滅びても、歴史的人物の偉業や、芸術家・文学者の作品、お世話になった恩師の言葉、亡き父母の思い出は、いつまでも私たちの心の中で生き続けています。

☆ ~ ☆ ~ ☆



松原泰道老師は「生涯修行、臨終定年」のお言葉どおり、101歳で亡くなる直前まで、仏教をやさしく説いてくださいました。4年ほど前に、龍源寺の近くの小さなレストランで「十牛図」の法話を2回拝聴し、はじめて仏教に関心を持ちました。次の法話を楽しみにしていたところ、松原先生が亡くなったのを新聞で知り、母と友人と一緒に葬儀に参列しました。するとしばらくして、龍源寺から3枚の色紙が届きました。色紙には「和顔愛語」「花無心」「生ききる」いずれも「百二歳 泰道」とあります。ご自分の葬儀に来てくれた人に配るようと、おそらく毎年毎年、何百枚と書いていらしたのでしょう。松原先生からいただいた3つのお言葉は、私の「心の杖言葉」として、ずっと大切にしていきたいと思います。

松原先生は法話CDの中で、八木重吉の詩「花はなぜ美しいか ひとすじの気持ちで咲いているからだ」を紹介して、「花は花だから咲くのです。今日は日曜日で人が大勢来るからがんばって咲こう。明日は月曜日で誰も来ないから咲かない、などとは決して言わない。誰が見ていても見ていなくても、花は無心にただ咲くのです。だから美しいのです」

☆ ～ ☆ ～ ☆

中下大樹さんの著書『死ぬ時に後悔しないために今日から大切にしたいこと』を拝読しました。僧侶としてこれまで多くの方の死に寄り添ってきた中下さんは、「人は生きてきたようにしか死ねない。人は急には変わらない。人の“逝き方”は“生き方”そのものである」といいます。

流通ジャーナリストの金子哲雄さんが、ご自分の葬儀で、ユーモアと気配りに溢れる手紙を遺して話題になりました。金子さんは普段からそのような生き方をされていたから、死ぬ時にもそういう手紙が書けたのですね。普段は気難しい人が、死ぬ時になって急にそのような手紙は書けないですね。

中下さんが著書で紹介されていた、アメリカ大陸の先住民族の格言が心に響きました。「あなたが生まれた時、周りの人は笑って、あなたが泣いたでしょう。だから、あなたが死ぬ時は、あなたが笑って、周りの人が泣くような人生を送りなさい」

☆ ～ ☆ ～ ☆

死について考えることはそのまま、いかに生きるかを考えることなのです。ユングは「死の練習に20年かかる」といいました。自分が死ぬということを合点するのに20年かかるということです。逆算すると、私もそろそろ練習をはじめなくては……。

